
彼の特別

あーゆ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼の特別

【Nコード】

N4171Z

【作者名】

あーゆ

【あらすじ】

大学生になった新一たち。

ゼミ仲間の国本沙耶は新一に片想い。

彼女がいることを知ったが本人にも止められないくらいの嫉妬の渦に飲み込まれる。

蘭と新一はこのまま引き離されてしまうのか…？

彼女は片想い中

「なー 卵焼き頂戴♪」

「やだ」

「ほんつつとに工藤くんのお弁当っていつも見事…」

「お母さんが作ってるの？」

ゼミのグループワークのために昼休みに研究室に集まった私たちのグループは
いつの間にか話題が”工藤くんのお弁当”

「あれ？でも工藤の両親は海外にいんだろ？」

「まさか自分で！？」

黙々と、でも美味しそうに工藤くんはお弁当を食べ続ける。

みんながワイワイと”誰が作ったのか”を論議しているのを聞きながら

彼を見つめていた。

「なに考えてんのか本当にわからねーやつだなあ」

田中くんが工藤くんの頭を小突いた。

「探偵たるもの、分かりやすくてたまるかよ」

「でもお前より服部のが馴染みやすいぞ」

「じゃあ探偵としてオレは服部に勝ってるな」

田中くんは工藤くんに悪態をついているが実はゼミ生のなかで一番の仲良しだった。

彼が事件に呼ばれてゼミを休んでもきちんと課題やその日の出来事を把握しているのは田中くんが連絡をしているからだ。

「そんなことじゃー彼女できねえぞ」

どき!!

”彼女”って言葉に反応してしまった。

「…よけーなお世話だ」

工藤くんは顔色を変えず答える。

「新一は”彼女には”優しいタイプだもんなー」

声のするほうへと顔を向けるとドアにもたれかかってニヤニヤしている黒羽くんと服部くんの姿があった。

「彼女には優しいタイプ？」

私の横で美緒が興味津々という感じで聞き返した。

「そ。こいつ、他人にほとんど興味ないくせに彼女のことになるとお構い無しやで。周りに見せたことない笑顔向けるしな」

「よけーなことやってんじゃねーよ」

少し顔を赤くした工藤くんは空のお弁当箱を鞆にしまい席を立つ。

「んじゃ、グループワークはそんな感じで。オレも少しまとめてみるから。お疲れさま」

「…彼女には優しいんだって、沙耶」

「からかわないですよ」

私、国本沙耶は東都大学法学部1年生。

工藤新一くんに目下片想い中…

「唯一の救いは、1年生のゼミ分け、基礎教養系は出席番号わけだから工藤くんと一緒だけど…それだけだもんなあ…アドレスすら聞けない」

「入学してから結構経つのにまだ工藤くんと壁あるもんね。でももうすぐ夏休み！！休み中もゼミの集まりあるしチャンスだって！！」

そうか。たしかにそうだ。休み中だって会える。
それにゼミ研究を口実に連絡をとることだって…

よし！！頑張るぞ♪

午後の講義

工藤くんの後ろ姿を眺められる位置に席をとりずっと考えていた。
彼女にしか見せない笑顔、優しさはどう表現されるのだろうか。
優しくされる資格が欲しい。

入学式以来ずっと見つめている

サークルにも入っていない彼はあまり女の子と話す機会もなく、お
そらくゼミ研究と一緒に私や沙耶が一番彼と話す女の子だろう。

彼のプライベートは知らないが学校の中では近い位置にいると思う。

頑張ってその距離を縮めたい…

「新一、今日なんか予定あんのか？」

「いや、特には。」

「今日母さんも青子も遅いらしいんだよ。飯、あやからせて〜」

「お。ええなー、オレも！！」

「ふざけんなっ。自炊しろよ！！」

服部ちゃんと黒羽くん、工藤くんの3人は入学前から友達らしい。とても仲がいい。

容姿も整ってるし3人そろつとより目立つ。

なんだかんだ言いつつ最後は工藤くんがおれて携帯で電話をして

”黒羽と服部と帰るから、突然わりいな”なんて会話をしていた。

電話の相手は誰だろう。

翌日――

工藤ちゃんと服部くんは休みだった。

黒羽くんの説明だと

”新一に來た事件の以来に面白がつて平次もついてった”ってことらしい。

「ゼミ研…工藤くんいないと進まないねえ…」

美緒がポロリと発言。

明後日仮提出なのに殆ど進まなかった。

「……………工藤の家、行ってみねえ？」

「お。いいねえ」

田中ちゃんと木下くんがいたずら顔で提案する。

「どんな生活してるか見たいしね！！いなかったら戻ってくればいいんだし！！」

美緒も行く気満々。

田中くんが以前、米花二丁目だと聞いていたこともあり行ってみることにした。

「……………」

「表札は工藤ってなってるよ……」

「……でか」

大きな洋館はなんの苦労もなく見つかった。

「ここに独り暮らし？どうしよう……家政婦さんとかいたら……」

ドキドキしながらチャイムを押す。

『……はい。』

「あ、工藤くん……！ゼミの田中、木下、木梨、国本です」

『はあ！？なんでオメーら……』

「突然わりいな……！あけてくれー」

田中くんがそういうと”渋々”と玄関があく。

「事件解決したなら学校来いよな。」

「さつき帰ってきたんだよ」

そう言いながら工藤くんはネクタイを緩める。事件にはスーツで向かうんだ、と1つ知れたことに頬がゆるむ。

「しかし独り暮らしなのに綺麗にしてんなあ…俺ワンルームだけど荒れてるぜ」

木下くんが感心して見回す。

「…まあな。」

工藤くんが少し照れたように視線をずらす。

私は少し違和感を感じた

ガチャガチャ――

「新一い。帰ってるの?」

「げっ!!」

「「「「え?」「」「」」

「…ごめん、友だち来てたみたいね…」

可愛い女の人リビングに遠慮がちに顔出した。

――だれ?

その後ろから意外な人物。

「なんだ。田中たちじゃん。」

「く…黒羽くん」

「蘭ちゃん、新一のゼミの仲間だよ」

黒羽くんが女の子に説明した。

そうすると彼女は納得したように頷く。

「邪魔してごめんなさい。黒羽くん、奥行こう!」

黒羽くんの背中を押してリビングを過ぎようとした彼女を工藤くんが制した。

「な・ん・で・黒羽がここにいるんだよ。」

「夕飯、3人で食べようと思って。だめ?」

「ダメじゃねーけど…」

「新一は俺を飢え死にさせる気か? ま、オメーは忙しそうだし蘭ちゃん、奢るから外で飯食おうよ」

3人のやり取りに田中くんがつっこむ。

「蘭ちゃん…って言ったっけ? 黒羽の彼女なんか?」

私もそう思ったけど何か違和感…

そしてそれを聞いた工藤くんの顔色が変わる。

「違うよ。蘭ちゃんは新一の彼女」

ニツと黒羽くんが笑う。

かかかか…彼女いたの！？

「あ…毛利蘭です！！」

慌てて頭を下げた蘭ちゃんはとても可愛かった。

リビングで話し合いをしている間、黒羽くんは奥でゲーム。

蘭ちゃんは私たちにお茶を出したり、工藤くんの脱ぎ散らかしたスーツの上着を片付けたりと目まぐるしく動く。

先ほど感じた違和感はこれだった。

綺麗に片付いている室内に対して

スーツはクシャクシャになってソファに置かれているし帰ってきて使ったであろうコーヒーマーカーの周りには粉が落ちていた。

第三者が、工藤くんの後を追うようにして片付けをしてくれていることは容易に想像できた。

「新一、あたしお買い物に行ってくるね」

蘭ちゃんが遠慮がちに声をかける。

「あ…じゃあオレも…」

「だ・め！！ゼミのグループワークなんでしょ？ちゃんと新一も参加して！！」

立ち上がろうとする工藤くんを制してお説教。

そんなことできるのは蘭ちゃんしかいないんだろうなあ…

「お邪魔しましたあ」

「またな、工藤！！」

「黒羽、あんま2人の邪魔すんじゃないぞ」

バタバタと玄関で別れの挨拶をする。

その時、蘭ちゃんが帰ってきた。

「あ、もう帰るの？」

「うん、お邪魔しました」

動揺する気持ちを隠しながら答えた。

「重そうね」

蘭ちゃんの手を見ると沢山の食材。

それを何も言わず工藤くんが奪い取った。

「…だから一緒に行くつつつたのに」

ボソリと呟くそれを私は聞き逃さなかった。

「工藤の彼女、美人だったなあ」

「お似合いつて感じで」

田中くんと木下くんが話していたけれど私はそれを素直に聞き入れることができない。

「沙耶、大丈夫？」

美緒が顔を覗き込んで心配してくれる。

「…ん、平気」

嘘をついた。

平気じゃない。

みんなと別れたあと
呟いてみた。

「……しんいち……か……」

しつくりこないその呼び名。
彼女は自然と呼んでいた。

羨ましいな。
ずるいな。

嫉妬…みつともないけど
それをとめることが私にはできなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4171z/>

彼の特別

2011年12月14日13時56分発行